

和州吉野郡群山記について

上 野 益 三

「和州吉野郡群山記」は、幕末の紀藩士畔田伴存（源伴存，号翠山）の名著である。この書名は世に知られることなく、伝存するものは恐らく著者の自筆稿本一本のみと考えられる。諸書に、「吉野(郡)群山記」，あるいは「吉野郡名山図志(誌)」として引用せられ、且現存している写本は、すべて本書の異本である。最後の書名の不当性については、後節で詳論する。

「和州吉野郡群山記」は、その内容が詳密正確、且科学的なことでは、当時の類書にその比を見ない。その編述の方法も著者独自のものである。そして、成稿後百二十年を経過した現今でも、その学術的価値は少しも減ってはいない。筆者がこの山岳誌に多大の興味をもったのは、それが幕末の傑出した博物学者畔田伴存の手に成ったものだからである。伴存が自然に対して、いかに大きい興味を抱いていたかは、植物や動物の研究ばかりでなく、それらを産する山岳の調査にも手を染めたことが、本書によってよくわかるからである。

筆者がはじめて本書に回り合ったのは、二十数年も前のことである。当時、大阪の堀田健男氏が伴存の著書数部を蔵せられることを伝聞し、同氏母堂ゆか子さんの好意によって、それらを閲覧することができた。「和州吉野郡群山記」はその中にあったのである。ゆか子さんの祖父龍之助翁遺愛の本である。堀田龍之助¹⁾は幕末から明治初年に生きた、大阪の西洋製薬業者で、かねてから動植物に興味が高く、家業の傍ら、伴存を師と仰いでその研鑽につとめた。そのような関係で、伴存の著書がいくつか龍之助の手許に残

1) 上野益三：“堀田龍之助。”「大阪史談」（大阪史談会発行），復刊，第5冊，p. 57—65，1961.

ったのである。そのうちの「群山記」²⁾は、恐らく師伴存の歿後に遺族から譲り受けたものと思われる。伴存の長男伴宣^{ともよし}は、明治になってから生活に窮し、亡父の原稿や蔵書を龍之助に乞うて度々金銭に替えた事実がある。ゆか子さんの手許にはまた、伴存が龍之助に与えた手紙が多数保存されてあった。それによる筆蹟と、龍之助手沢の「群山記」とを、よく比べてみると、この本は疑いもなく、伴存の自筆稿本であった。各冊に、伴存の筆で、「和州吉野郡群山記 紀藩 源伴存記」と書かれている。今、便宜上、この本を「堀田本」と呼ぶが、これこそ、「群山記」の定本たるべき唯一の現存本である。

堀田本「群山記」は、龍之助遺愛の蔵書、伴存の書簡、その他の品々とともに、亡き健男氏の夫人堀田美恵さんから寄贈されて、現在は大阪市立博物館の所有に帰している。寄贈に先だち、筆者は美恵さん並びに当主堀田健彦氏の依嘱により、蔵書等の整理に当たった。そして「群山記」には、二十数年ぶりで再会したのである。この一文は、そのときに作ったノートを基とし、本書の学術的真価と、伴存の研究態度とを世に顕わさんとするものである。

1. 「和州吉野郡群山記」の構成と異本

a) 堀田本「和州吉野郡群山記」

この本は6巻6冊である。その第一巻に載せた総目録では7巻となっていて、第七巻が物産志である³⁾。しかし、出来上った物産志は上下2巻となり、「群山記」全体の構成は8巻よりなることとなった。これは、伴存が龍之助に与えた次の手紙によって明らかである⁴⁾。

「(前略)

和州吉野郡群山記 八冊之内

2) 以下「群山記」と略称する。

3) 山口華城「贈従五位畔田翠山翁伝」(1932)のp.27に、吉野群山記七巻合六冊とあるのはこれを伝え聞いて書いたものか。ただし、山口氏は物産志を群山記とは別本としている。

4) 今、句読点を加う。以下の引用文についても同じ。

風土志六冊 物産志二冊

右京都へ御遣被下候節、風土志六冊も御望候へは御見せ可申旨、御申遣可被下候」(図1)。

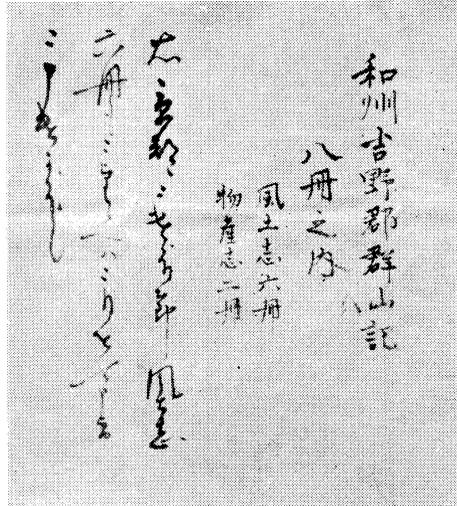


図1. 伴存が「群山記」の構成を龍之助に知らせた書簡の一部

これは十二月廿七日付で、弘化四年と考定される。龍之助はこのときには、伴存から「物産志」だけを受取っていて、「群山記」を手にしていない。「京都へ」というのは、榕室山本沈三郎を指す。沈三郎は山本亡羊の二男で、著名の本草学者である。風土志は山岳地誌を指し、物産志は動植物誌（鉱物をも含む）である。この物産志上下は、「和州吉野郡中物産志」と題し、「群山記」とは独立の著述かのように、世上に伝写本が残存している。しかし、そこに載せた動物や植物の産地を注記するのに、ただ地名をあげるのみである。これは1～6巻の風土志を参照すべきことを慮ってのことであろう。筆者も風土志を見ない前に物産志を閲して、そこに示された地名がどこか、わからなかったことが少なくない。

堀田本による「群山記」の巻序その他は次の通りである。「物産志」につ

いては今補足した⁵⁾。

巻序	題 目	墨付枚数	挿図数
1	目録〔全巻の総目録〕 山上嶽記上	1 } 43 } 44	0 10
2	山上嶽記下 } 吉野山之記 } 稲村嶽記 }	46 } 4 } 50	1 } 2 } 3
3	弥山記 天川荘記 廻川山記	32 } 8 } 53 13 }	11 } 2 } 17 4 }
4	釋迦嶽記	57	24
5	大臺山記	43	10
6	玉置山記 和州吉野郡十津川荘記 和州吉野郡北山荘記	68 } 10 } 78	4 } 11 } 16 1 }
	計	325	80
7	和州吉野郡中物産志 上	48	34
8	同 上 下	39	7
	総 計	412 枚	121 図

このうちで、巻の一の山上嶽記上には、小篠記、柏木和田村洞之記を、巻の四の釈迦嶽記には三重滝記を収む。用紙は美濃紙を用い、每冊紙縫で綴じ、各紙は表裏墨付 9 行を原則とし、行書を用い、引用文は楷書の細字でていねいに書いてある。

本書に収められた多数の挿図は、本書の価値を高めるのに大きい役割をしている。筆者は今までに多数の伴存自描の動植物写生図や、その著「白山記」中の山のスケッチを見た経験から、「群山記」の山岳図が、本文同様、伴存の自筆と断定する。そして彼の動植物図が科学性を失わない、見事なものなることに深く敬服する。彼のすぐれた画技は山のスケッチにも遺憾なく発揮された。目の前においた動植物を写生するのとは大いに異なり、雄大な山容を小さい紙面に再現するのは至難の業である。伴存はこの困難を見事に克服した。緻密な彼の頭脳は、高所からの展望あるいは鳥瞰と、谷々尾根筋の詳しい踏査の結果とを総合して、いくつもの山岳図をつくるのに成功した。

5) 筆者架蔵の伴存自筆稿本による。この本は富山の医師窪美氏の旧蔵本である。後出、注 24 参照。世上の伝写本には「吉野郡物産志」と題するものがある。

中には山波を圧縮して画面におさめるとか、必要部分を特に強調するなど、極めて効果的な画法を駆使している。谷文晁の「日本名山図会」も多くのすぐれた山岳図を載せているが、デフォルメが多過ぎ、絵画としての芸術性はとにかく、山岳図として見るには、象徴的に過ぎて科学性を欠く憾みがある。伴存の山岳図は如実に山岳を写し、彩色によって十分効果をあげている。一つの山をいろいろな方面から写生し、その山全体のイメージを、手にとるようにわれわれに与えてくれる伴存の手法は、「群山記」以前はもちろん、以後においても見られない。「群山記」の学術的価値の半ばは、その写生図にあるとさえいえよう。

b) 白井本「吉野郡名山図志」

国立国会図書館蔵。この本は5巻5冊よりなる。巻序を付していないが、仮に前記堀田本にならえば、第一冊：山上嶽、吉野山、第二冊：弥山、楊枝嶽、天川荘、廻川山、稲村嶽、第三冊：釈迦嶽、第四冊：大臺山、北山荘、第五冊：玉置山、十津川荘となる。「吉野郡名山図志」(志でなく誌を用う)を紹介した笹谷良造氏は、この白井本を見たものと思われる⁶⁾。この本は東京の加賀豊三郎氏蔵本を、白井光太郎博士が大正五年に写させたものである。その原本がどのような本かは知る由もないが、山口氏(前出,注6, p.55)が加賀氏本を指して、“此の自筆原本は”と書いているのは明かに誤りである。加賀本の構成から見て伴存の“自筆原本”でないことは、堀田本と比べてみて明白であるし、特に重要なことは、伴存自身一度も「名山図志」なる書名を使ったことはない。加賀本を写した白井本では、堀田本の巻の一と二とを一冊とし、稲村嶽を弥山の巻の最後につけ、北山荘を大臺山と一緒にしてある。もっとも、地理的には、北山荘は大台山の西側であるから、今併する理由はあろう。しかし、伴存自身には別の考えがあって十津川荘と対置させたものらしい(3~5, 大臺山記の項参照)。白井本の原本なる加賀本、あるいはそ

6) 笹谷良造：“畔田翠山翁と吉野郡名山図誌”。岸田日出男・笹谷良造共著「吉野群山」(東京、郷土研究社、1936), p.348—359.

れ以前に、写本がつけられるときに、誰かがその内容を検討して並べ替え、5冊に“編集”したと考えられそうである。「吉野郡名山図志」なる書名もそれに応じて与えたのだろう。編集だけでなく、内容にも多少の変更があり、原本にない図を加えたところもあるが、本書は明らかに「群山記」の異本で、「名山図志」なる書名は全く「群山記」のシノニムである。写本のことゆえ、枚数に意味はないが、堀田本の半分よりやや多い。図画は一応うまく描いてあり、彩色もよくできているが、堀田本には遥かに及ばない。実地に山をスケッチして作った図と、出来上った絵図を模写したのとは、後者が迫真力に欠けるのはやむを得ないことであろう。

c) 天理本「和州吉野郡名山図志」および「吉野群山記」

天理図書館蔵。両書とも「群山記」の異本で、高木利太氏旧蔵本。「和州吉野郡名山図志」⁷⁾は、白井本と同じ本を写させたもので、山上嶽記の奥にある、昭和二年一月の高木氏の識語によって知られる。従って、内容も白井本に一致する。そして、「和州吉野郡中物産志」上下二巻を伴っていて、全部で7巻である。紙数は全5巻で212枚、白井本の224枚とほぼ一致する。特に玉置山記の冊はどちらも42枚である。天理本には「金嶽全図記」(注：金嶽は山上嶽)、釈迦嶽全図記、「臺嶽全図記」(注：臺嶽は大台ヶ原山)の見返しがあり、白井本ではこれらが中扉になっているのと一致する。弥山記、玉置山記の両冊にこのような題字がないのも両本に共通する。恐らく原本の加賀本になかったのであろう。「金嶽全図記」のような題字を付加したのは、「名山図志」という書名にふさわしい形にしようとしたためであろう。それは、大台山記の附録として、「台山陟歴略記 南紀野呂九一郎筆記」なる一文12枚を付したことからも察せられる。しかも、南画風の山岳絵3枚を載せたのは、全く筋違いの感じを受けることは否み難い。野呂九一

7) 高木利太：「家蔵日本地誌目録」(大阪，1927)，p.174—175。“家蔵本は東京加賀豊三郎君蔵本によって書写し題名を之に従った”，とあるから，原本がこの書名であったことがわかる。

郎、号介石、南画家で紀藩に仕えた。

天理蔵の「吉野群山記」は不揃いの3冊本で、釈迦嶽記、大臺山記、図絵よりなる。図絵は前2冊の挿図（左右見開き8図）を1冊に集録したものである。内題はなく、ただ題籤に「吉野群山記 釈迦嶽記」のように記するのみ。著者名はない。これも、前記「名山図志」と同じ意図による写本で、大台山記に「紀州介石先生記」なる一文（3枚）を付載する点も同じ。ただ書名が原著名に近い。

天理本「和州吉野郡名山図志」、ならびに、「吉野群山記」の挿図は、互に大同小異の出来ばえであるが、堀田本には遥かに及ばない点は同じである。伴存の図を見て受けた感動を、これら写本の図から受けることはできない。挿図の模写者は、むしろ自己の画技を誇示しようとしてか、原本の趣を変え、結果としては原画を歪曲したとの観を与える図が混っている。弥山から釈迦に至る山波の大観などは、全く大峯連山を知らぬ者の手になったことが明らかである。

d) 「群山記」の書誌学的考察

「吉野群山記」になる書名が見られた最初は、佐村八郎の「国書解題」らしい⁸⁾。同書は、「吉野群山記 写本六卷 畔田伴存、吉野山中の地理山脈等の形勢を詳説したる者也」とだけ書いてある。この六卷は正しいが、佐村氏は果たして6巻本を見たのであろうか。高木氏の「和州吉野郡 名山図〔志〕誌」（今、天理本）の解題には、「本書は巻序を定めず各山別に一卷をなし」⁹⁾とあるが、後に¹⁰⁾「同本吉野群山記の巻序は、第一巻山上嶽、小篠記、柏木和田村洞之記（中略）…とある」と訂正している。その巻序、各巻の内容構成は、全く堀田本と一致する。「とある」とは、高木氏は何によって書いた

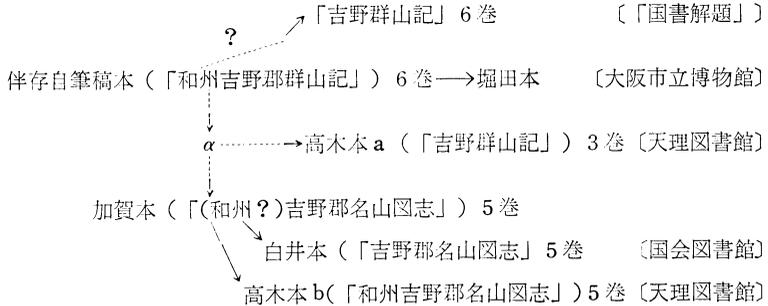
8) 初版明治33年(1900).筆者は「増訂国書解題」(1926), p. 1982 によったから、初版の登載事項は不明。

9) 前掲, 「家蔵日本地誌目録」, p. 174.

10) 高木利太: 「同上, 続篇」(1930), p. 3, 「続篇のはじめに」の中。

のであろうか。

1, a-c の諸本の系統は、大凡次の如くである。



堀田本と加賀本との間に、写本 α を想定したのは、高木本 a が書名も内容も「群山記」に従いながら、なお且野呂介石の一文を付載する点で、別にしたのである。書写の系統の確実なのは実線で示す。高木本 a 、加賀本とそれを写した白井本、高木本 b はすべて堀田本の異本である。これら以外の写本が伝存しているとすれば、この系統のどれかに属するであろう。

書名は堀田本を以て正名とする。伴存が龍之助に与えた多数の書簡には、吉野群山記なる語は度々出るが、吉野名山図志なる語はただの一度も出ない。恐らく彼の歿後の命名であろう。名山図志なる題名は白井本の条下で触れたが、笹谷氏のように、この名が“いかにも古風で面白いし、また六七十枚の立派な図録がある点で、内容にも適当しているから、やはりこの名を用いようと思ふ”¹¹⁾という原著者を無視した、かなり勝手な発言がある。同氏以前にも古く同じ考えの人がいて、やがてこの書名が固定したのだと思える。そして、伴存の苦心になる著述が「吉野郡名山図志」となってしまったのは、まことに遺憾なことといわねばならぬ。科学者伴存には“名山図志”などを編述する考えは全くなく、あくまでも山岳の学術的な自然誌をつくることにあったのは間違いない。物産志2巻をつくって、全「群山記」8巻を完成したのが、何よりの証拠である。筆者が本文をつくって、先人の誤りを正そうとするのは、全く著者のオリジナリティーが失われるのを恐れ且悲し

11) 笹谷良造，注6，p.351.

むからである。伴存の学者的良心は、「物産志」の引用文献中に、^ひ聞と書いたが原文は俗字の^ひ樋であったから、そう訂正してほしいと、態々龍之助に一書を送った位である（嘉永五年十月十七日付）。それゆえ、書名にも極めて神経質であっただろうことは、想像に難くない。

なお、笹谷氏は、「吉野郡名山図誌」には、白井本の「どこにも、「和州」なる文字を冠せられていなかった。」と疑問を残している¹²⁾。しかし、同じ加賀本を写した白井本に「和州」がなく、高木本は「和州」を冠する。また、両本とも名山図誌と“志”を用いているのに、笹谷氏は始終“誌”“を使っている。高木氏はその“家蔵本”（1, c）が明らかに“図志”“となっているのに、その解題には“図誌”と書いている。このような些細な点の無神経さが、書誌学的な禍根を後に残すこととなった。

2. 「群山記」成立の経過

文政五壬午年（1822）六、七月、畔田伴存は遠く加賀国（石川県）に行き、白山に登った。そして、七月下旬に、「白山記」（白山之記）と題する一書をつくった。「群山記」と同じ堀田本中に伴存自筆の「白山記」があり、墨付35枚、彩色挿図17よりなる。この本をよく検討してみると、山岳誌としての記述の進め方、山のスケッチの作り方等、すべて「吉野群山記」の原型であるかのように思える。いわば、「白山記」が後年の大著「群山記」の習作の観がある。「白山記」と同時に、「白山草木志」上下2巻ができたことも、「群山記」に、「物産志」が付随してできたのと、その構想を同じくしている。このころから、伴存には将来吉野群山の山岳志を書く意志があり、それをどう纏めるかの試みとして、白山を選んだのではなからうかと、筆者は想像する。白山のような独立高山が、吉野群山のような複雑な山彙よりも纏め易いのにながらない。「白山記」を書いた時の伴存は31歳の壮年であった

¹²⁾ 笹谷、前掲、p. 351.

が、「群山記」をつくったときは、もう 50 歳を過ぎていた。その学問が円熟の域に達したときであったことは、両書を読み比べてみると、よくわかる。しかも、当時の伴存は「群山記」に専念していたわけではなく、「水族志」や「古名録」のような、大著にも取り組んでいたのであるから¹³⁾、彼がいかに旺盛な体力をもち、しかも恪勤精励であったかがわかる。

伴存の吉野群山踏査は、何回となく繰り返えし行われたと想像される。伯母峯の記事（巻之五、大臺山記）中に、「伴存等三人、内老人熊野西村重篤子、文政年中」とあるから、文政年間既に足を踏み入れていたのである。三人の中の他の一人は従僕であろう。また天保十二丑十二月に十津川山中の記事がある。巻之四釈迦岳記には、「伴存等ノ初度釈迦嶽ニ登リシハ」とあるから、ただ一回の登攀でなかったことは明らかである。また、巻中、弘化二年春の記事に数回出会うし、弘化三年十二月の十津川での記録があるので、完稿はそれ以後のことである。

明治二十八年（1895）八月、帝国大学（東京）農科大学助教授白井光太郎が、樹木調査の目的で吉野を基点とし、八月一日大台ヶ原山に登り、さらに北山川に沿って、四日、前鬼に赴き、同地を六日に出発、釈迦岳、弥山を経て七日山上岳に達し、八日吉野に帰着した¹⁴⁾。白井は前鬼の森本坊の坊主五鬼継義円の父という老僧の談話を、書きとめている¹⁵⁾。その中に、

「四十年以前紀藩の本草家、畔田重兵衛と云ふ人、一僕を具し、此地に來り、採葉せり、体軀肥大の人にて、両刀を帯び居たり、裏行場に至り、種々採集し、此時ツバメラン、ケイビラン、ムギランなど云ふ植物を習ひたり云々。是則ち畔田翠山翁の事なるべし。」

この文中、畔田重兵衛という人とあるのは、是則ち以下の白井の推則通

13) 上野益三：「明治前日本生物学史」第1巻（日本学士院編，日本學術振興會刊）p. 471—483, 1960.

14) 白井光太郎：“大和吉野より大台原山，釈迦岳，弥山，山上岳を経て再び吉野に出づる記”。「山岳」，第2年，2号（明治40，6，1），p. 1—17，4図，折込古地図複写1葉，1907.

15) 同上，p. 13.

り、伴存なることは間違いない。ただし、重兵衛は十兵衛であろう。十兵衛は伴存の通称である。また、「四十年前紀藩の本草家」とあるのは、老僧の記憶ちがいであろうか。明治二十八年から40年前といえば、安政三年で、伴存の歿年（安政六年）に先だつこと3年、その65歳のときである。筆者の推定では、この年（安政三年）より以前に、「群山記」は既に成稿していたと思われるから、もう10年あまり遡って弘化年間、つまり50年前としてみると、大分辻褃が合ってくる。つまり、伴存は文政から天保にわたる20数年間に、度々群山を跋涉してノートを取り、スケッチをつくり、植物や動物を採集し、それらを6巻の山岳志、2巻の物産志に纏めたのが、弘化の末年（弘化は四年二月二十八日改元、嘉永元年となる）であったと見てよいのではないかと思う。

伴存は「群山記」を書くに当たり、吉野群山に関係ある多くの文献を引用している。各巻における引用の多少によって古来それらの山々が知られていた程度を察することができる。例えば、吉野山が最も文献に富んでいるのは当然であろう。全6巻に引用された群籍は凡そ80種である。そのうち、最も屢々引いてあるのは「輿地通志」（日本輿地通志、畿内部大和国、享保二十年）の100箇所、それに次ぐのが「和州旧跡考」（和州旧跡幽考であろう）である。第三番が貝原篤信の「和州巡覧記」（大和めぐり）で、特に巻之二吉野山記に引用が多い。

「群山記」の編成を報じた伴存の手紙をさきに引用したが（1, a）、これに先だつ十月十九日付（弘化四年）で、伴存は次の一文を龍之助に送っている。

「（前略）吉野物産志式巻出来候而、外へ見せ有之候ハハ戻り次第御見せ可申上候。外ニ吉野郡群山志六巻都合八巻、内物産志上下二巻有之候事ニ御座候。跡より物産後志壹巻出来申候（後略）」（図2）。

この文中の「物産後志」なるものは、計画だけで完成しなかったものらしい。上に引きつづき、十一月廿一日付で、伴存は次の手紙を龍之助に与えた。

「弥御安康珍重奉存候。吉野物産志二冊并紫藤園攷證乙集壹冊差進申候。御写置可被成候 以上」

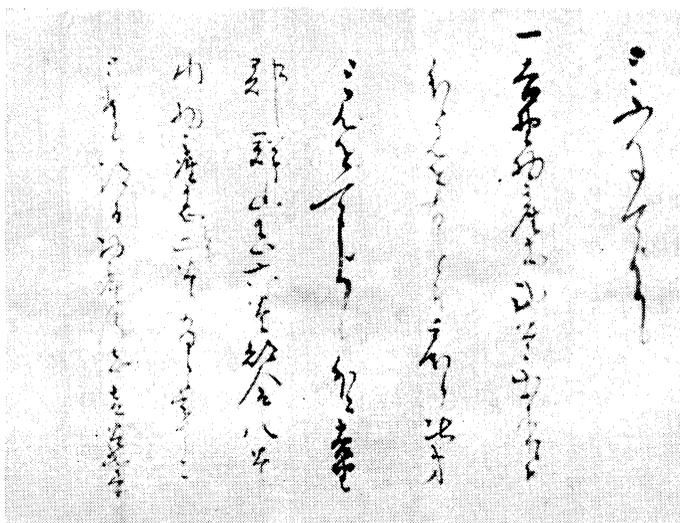


図2. 伴存が龍之助に「物産志」の出来を報じた手紙の一部

紫藤園は伴存の号の一である。堀田本中に龍之助自筆の「物産志」があるのは、この手紙に従って写したものであろう。

3. 「群山記」の内容の概要¹⁶⁾

1) 第一巻，山上嶽記上

この巻は洞川^{どらがわ}にはじまる。山上岳の西麓三里のこの村は、現在はバスが通じるが、伴存当時は山間に孤立して小集落であった。伴存はその生活習俗に興味を惹かれたとみえ、如実に記述している。駒鳥の巣子を捕えて諸国へ出すことや、陀羅尼助（伴存は多羅助と記す）のことなどには、特に興味をもっ

16) 笹谷良造氏が「吉野郡名山図誌」の紹介を、奈良山岳会発行の雑誌「山上」第1巻（1933）以降に連載。筆者はその一部のほか不見。同氏の「吉野群山」（注6）にその概要を載せる。

た。多羅助の原料黄蘗皮(キハダの樹皮)は、洞川には少なく、上方からも来るが、天ノ川から出すものが多い。北山の溪の人達は、黄蘗を背負って、小篠に登り、山上岳を越して、昼八時^つごろ洞川に降って商う。伴存は洞川から山上岳への登路を詳しく記述する。山上岳記では修験道に触れることが多く、行場を述べることが詳しい。さらに記文は小篠宿に及び、伯母谷覗を経て北山川の溪に下る。柏木に下った伴存は、同地周辺の鍾孔洞を探検し、洞内の状態を詳しく書いている。

山上岳を西から望んだ2ページ半(1丁半)にわたる、すぐれた概念図を第二巻の最後に載せてある(図版I)。稲村岳から北東に、山上岳を展望した印象に基いて、作図したらしいが、右手前に稲村自身も描いてある。山上岳頂上付近は手に取るように誇張してあるから、稲村岳はただ小さい山として表わしている。実際の稲村岳は標高1,725.9mで、山上岳の1719.2mをわずかに抜いている。登路は朱線で描いてあって、わかり易い。

2) 第二巻, 山上嶽記下, 吉野山之記, 稲村嶽記

この巻の殆んど大部分は吉野山の記であり、神社仏閣の記事が多い。最後に載せた稲村岳記は4丁に過ぎないが、キレットのすぐれた図を挿む。

3) 第三巻, 弥山記, 天川荘記, 廻川山記

弥山記は、次の釈迦嶽記とともに「群山記」の中心をなす力作である。伴存は弥山を次のように概観する。

「弥山^{みせん}ハ御山又深山とも書。和州吉野郡天の川より登り六里, 山上嶽より大峯通八里余, 和州吉野郡北山荘川合村より四里, 和州吉野郡舟川荘篠原村より四里半也。(中略) 嶺より四方の高山不見, 東南の方北山の荘の北山, 麓に見ゆる計也。此所天の川弁財天の奥之院と云。山は平なる大山なり」

伴存は奥駈け道をとって、大峯山脈を縦走したことはなかった。伴存のころには、熊野よりする順の峯入を逆山として咎め、吉野から入って南下するのを順山というようになっていたと書いている。伴存は天ノ川坪ノ内から弥山^(文)へ登った。坪ノ内から登山人足老人賃金十二匁、坪ノ内から登路二里半で、大門からの路と合し、朝鮮岳(頂仙岳)を巡って、弥山川の源流を渉れ

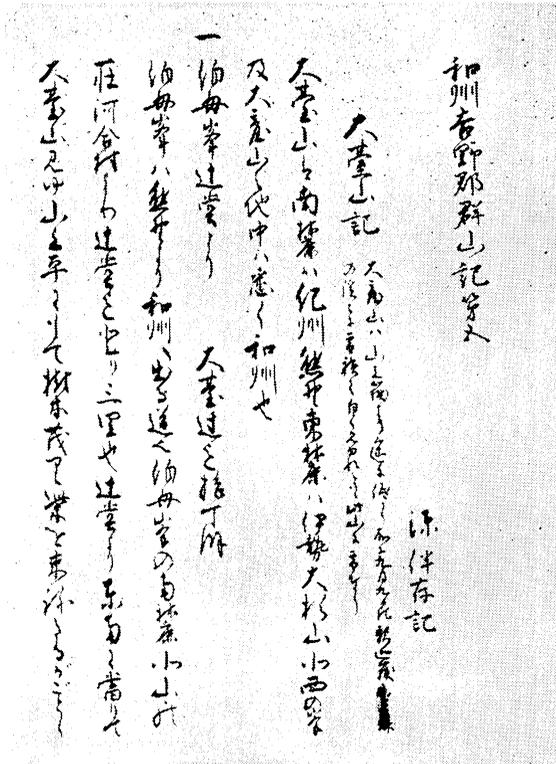


図3. 「群山記」第五巻の開巻第一ページ

ば、弥山の頂上に近い。博物学者伴存はこのあたりに三葉黄蓮が多いことを発見した。また、川瀬から舟ノ川の溪谷沿いに岩茸取りの通う路をも登っている。

弥山の西側、弥山との高距差 1,000m に近い天ノ川の深い谷がある。伴存はこの谷沿いの天ノ川二十三村を見て歩いた。北東端の洞川から西端の塩野、塩谷、瀧ノ尾に至る、延々 20km 余にわたる天ノ川の曲流に臨む散村で、坪ノ内もその一である。「天の川は板屋板壁にして家建より往来の道広し。天の川は風吹事烈し。若西南風吹時ハ雨戸なと引離るゝに至」と、この地の状況を写す。伴存は、また、この山村が薬草栽培に励んでいるのを見た。「人家に吉野人參

を作る。又山芍薬、当薬、川芎、前胡をも作る。此地細葉卷丹を産す。葉細く花また常のものよりやせ細し。所々黄蘗多し。¹⁷⁾

弥山で伴存の注目したのは、仏生岳北西の七面山である。この特異な形の山を、楊枝山（楊枝ヶ宿）の方から見ると、南北に峯があり、南峯の方が高く、中間は平らである。「黒く樹木生茂れり其南半腹に七面の倉と云岩在。高さ百五拾尺余也。岩茸多し」。この山へは峯通りから西へ入るほか、旭ノ川の中流、^せ迫からの登路を記す。「此山上に登れば魔有て道を迷ハさると云」とは、方角を誤らせるような、山上の地形を言ったのであろうか。

廻山川記は、現在の川^{こうせい}迫川や、その上流の神童子谷の探検記である。「廻山川ハ天ノ川莊北角村より奥弐里參拾丁の諸山を云。勝れたる高山なく、諸山の間の溪水廻り流るゝにより廻山川と云」。神童寺^(マツ)谷の感想は、伴存は「東に行者帰（行者還）、北に小笹、山上嶽相並ひたり、南は弥山より諸山相重りたり。誠に深山にして人里を離る事遠し」と書いている。俚人に聞いて作った記事ではなく、多くの困難を克服して探検した実感が溢れている¹⁸⁾。伴存はまた南に弥山川を廻行して惣門滝（雙門滝）を見、弥山に登った。川迫川の源流を極めて尾根に出ると、行者還岳の南で、古くから北山と天ノ川との間の重要な交通路、北山越がある。

4) 第四卷、釈迦嶽記、三重滝記

「伴存等の初度釈迦嶽に登りしハ梅雨年の事也。中谷村を朝に出、菅芒をはらひ篠を分て釈迦嶽の頂上に登る頃ハ入逢（入相）の時分也。釈迦に詣て神仙（深仙）に下る時、道暗くなりてさだかならず、漸にして神仙の宿（しゅく）に着ぬ」。旭ノ川

17) 吉野人参はウコギ科のトチバニンジン、山芍薬はキンボウゲ科のヤマシャクヤク。当帰（ニホントウキ）、川芎（センキュウ）、前胡（ノダケ）の3種はセリ科の草本。川芎のみ中国からの渡来種。ノダケと前胡とは別物だとの説がある。卷丹はオニユリであるが、伴存が見たのはコオニユリであろうか。黄蘗はミカン科のキハダで、その樹皮は陀羅尼助の原料として洞川へ供給する（山上嶽記の条参照）。

18) 現在でも、この谷の廻行がそれほど容易なわけではない（仲西政一郎：“神童子谷”。「アルパインガイド、6、近畿の山」、5版、1969、p. 183—185）。

下流の中谷から、谷沿いに直接釈迦岳の西斜面を登攀したのである。

伴存は釈迦岳を西側から見た珍しい図をつくった（図版Ⅲ）。西斜面に直角に近い谷を、うまく画面に収めたのは、その苦心の結果であろう。さらに、左前面に七面山の異様の山容を描いたのも、この図の効果を倍加している。伴存は、また、釈迦岳を遠景として中央に据え、その北に連る山波と、左右の谷々とを一枚の画面に収めた鳥瞰図をつくった（図版Ⅱ）。その観察力の正確さと、適確な表現力とが遺憾なく示され、恰も航空写真を図に再現したようである。ただ、この図に大峯山脈の最高峯八経ヶ岳（1914.9m）らしいのを描かないのは、弥山と同一の山と見たためであろうか。釈迦岳図には、山の左肩に、富士山が描いてあり、本文には、「晴天のあした日未だ出さるころ、駿河の富士山海中に見ゆ」と記す。伴存はそのような好機会に出合ったらしい。とにかく、「釈迦嶽ハ大山にして群峯の上に出る」との認識に立った伴存が、この山の記に力を注いだのは当然であろう。

伴存は中谷からのほか、東斜面北山溪の白川村古代から善鬼（前鬼）へ赴き、ここから釈迦岳に攀じ、峯通りを北へ弥山へ行ったことがある。善鬼は東西に向った山原で、四囲深山で湿気が多く、畳ふすまが腐り易い。稲を植えても稔らない。四五月ごろ、春不老（伴存はオホガラシという）という菜を塩蔵して客に出す。伴存は三重滝に行って巧みなスケッチを作り、多くの植物を採集した。伴存は十津川内原から嫁越峠へ達したこともあったらしく、嫁越以南の大峯古道にも触れているが、自らこの道を通ったことはなかったらしい。釈迦岳等の鳥瞰図（図版Ⅱ）の釈迦の左肩に宝冠岳、さらにその南に千草岳を示しているだけである。そして、千種岳は「宝冠嶽の南に並ぶ山也」とだけ記す。釈迦の南に接する大日岳の東、二つ石の北西にある千手岳が、彼のいう宝冠岳で、奥駈道と前鬼へ下る道との分岐点の南にある石楠花岳が、千種岳を指すのだと、仲西氏から数えられた¹⁹⁾。千手岳と千種岳²⁰⁾とは、

19) 仲西誠一郎：「山上ヶ岳・弥山」（『山と高原地図シリーズ、64、大峯山脈（一）』昭文社、1969）。

20) 高頭式「日本山嶽志」（1906）、p. 238の「仙嶽（別称、千種嶽、笠捨山）」とある山ではない。

ともに大峯奥駈け七十五靡にかぞえられ、前者は第三十四、後者は第三十行場である²¹⁾。

「釈迦嶽より楊枝に至る峯通り、常に西南海より吹上る嵐烈して、急風なる時は地に生ずる草木の末を手に捕て、凌ぐ程なり」と、伴存はその体験を述べている。白井もまた同様の経験をした（前掲、注14, p. 15）。白井が楊枝ヶ宿付近で見た、純林状のオオヤマレンゲの群落を、伴存は既に「和州吉野郡中物産志」中に記録している。大山蓮華の大山は大峯山から来た名である。

5) 第五卷大臺山記

現今の大台ヶ原山。伴存が文政年中にこの山に登ったことは既に述べた。伯母峯からの登路によったのである。後年（嘉永6？、二月二十七日付書簡）彼が山スズという竹のことを書き、「(前略)此竹和州山上嶽釈迦嶽七面山大臺山極テ多ク山腹皆此也。僕(注：伴存)目撃スル処也。大臺ハ此竹ヲ押分山中ニ入レリ」と、その登路の困難を追想している(図4)。大台山記が大峯諸峯の記文に比べて簡略の観を与えるのは、この山が大峯ほど開けていなかったためである

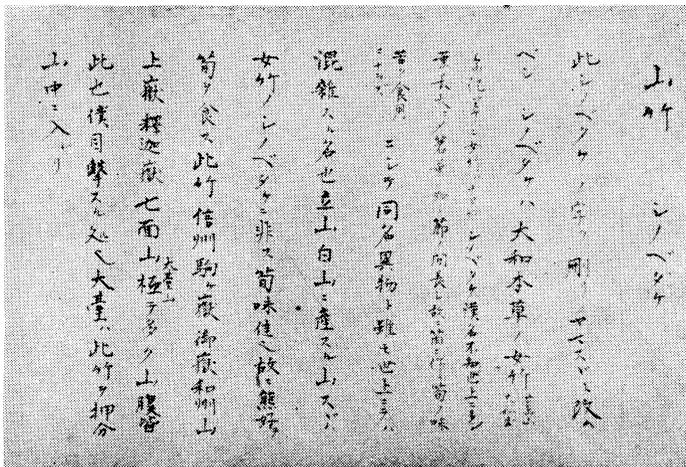


図4. 伴存が手紙に添えて龍之助に与えたメモ。左端4行目以下参照

21) 大伴茂：「天皇と山伏」（名古屋，黎明書房版，1966），p. 178—180。

うか。彼は巴ヶ岳まで登ったが、全山の十分な踏査はできなかったらしい。尾鷲からの登路の記述なども、同地での聞書のように思える。図にも古図の模写を混え、精彩を欠くことは否み難い。ただ文中処々動植物に触れることが多い。

6) 第六卷，玉置山記，和州吉野郡十津川莊記，和州吉野郡北山莊記

吉野郡最南部の玉置山，大峯山脈東西両側の谷，すなわち，十津川莊と北山莊との地理と民俗が第六卷となす。十津川と北山川とは，大峯山脈が南に尽きるところで，玉置山を挟んで合流し，新宮で太平洋に入る。大峯山脈を中軸とした，伴存の「群山記」は，北山莊記を態々玉置山記と併置したのである。「吉野郡名山図志」の写本編者は，原著者の真意を解せず，北山莊記を大台山記に合併したのだと，筆者は考える。

「群山記」に釈迦以南の山伏道の記述がないから，伴存は奥駈けで南下したのでないことが察せられる。十津川筋の平谷，猿飼から山手谷を経て直接玉置山へ登り，また瀨からも行けることを述べる。「伴存等玉置山へ登れるハ九月中旬也」。下山は十津川筋の切畑へ出た。玉置山から切畑まで百五拾丁，切畑村から熊野本宮へ五拾丁。川筋の美しいスケッチがあり，伴存は山だけでなく水もうまく描画できたのである。玉置山上に玉置神社が鎮座し，古来大峯への順峯の出発点であった。伴存は「群山記」が完稿に近づいたころ，吉野郡の南に接する牟婁郡の動植物を調査中であったから²²⁾，玉置山一円は，その連関の下にしらべたにちがいない²³⁾。

十津川莊記は十津川沿いの村々を訪ね，その地理と生活とを記録したもので民俗資料に富む重要な著述である。家の造り，家内の造作，住民の日常生活から人情風俗に及ぶ。「群山記」1—5巻は，山中における宗教的施設や，人間の宗教的活動に触れるほかは，全く峯や谷の学術的記述に費され

22) 畔田伴存：「熊野物産初志」五巻に纏められた。その成稿は嘉永元年（1848）ごろ。

23) 小清水卓二・岩田重夫：“玉置山所産植物目録”は527種の草木を載せ，うち69種は羊歯植物である（十津川村編：「十津川の生物」，1961，p.103—129）。

た。十津川荘記と同様の記事は、洞川、天ノ川、前鬼等にも多少は見られた。伴存は博物学者であつたから、随処に博物学的記述に富む。野猪や鹿が多いので、田畑の害を防ぐため、村毎に“猪垣”を造ることや、煙草を栽培してその葉を出すこと等。「香魚（アユ）は長殿に至り止りて川上に登らず」といい、また、アメノウオはアユよりも上流に遡り、辻堂の下流宇井の産は、「尺斗、春月味美也」とする。近年、長殿の下流上野地より下に、風屋、二津野両ダムができ、伴存の記録は120年前の状態を示すものとして有用である。伴存は「十津川荘山中山蛭なし故に往来蛭のうれゐなし」とするが、果たしてそうであろうか。また、「豺狼は山中に多し十津川の西、伯母子嶺、水峯辺誠に夥し」としたのは、大台山に狼なしとしたのと対照的である。水ヶ峯は伯母子嶺の西、護摩ノ段山の東である。

北山荘は北は大台山で南は紀州熊野に至る地域だと、伴存は定義する。「西は行者帰、弥山、楊枝山、釈迦嶽、転法輪嶽の大山続きたり」と述べ、材木を「北山川の流に下し熊野新宮に出」すことを見ている。水系を基本にして、北山荘記と十津川荘記とを、同一巻に併置したことは、伴存が立派な地理学者であったことを示している。「北山の山陰に草蛭多し」としているのは、十津川荘と著るしく対照的であるが、これはヤマビルに悩まされた程度の差に基くことではなかろうか。

7) 第七、八巻、和州吉野郡中物産志

「群山記」1—6巻に載せた地域の植物および動物の記載で、若干の鮎物を付載し、「群山記」と併せ見るべきものである。当時における最もすぐれた植物誌、動物誌で、後人の企及し得ない内容を具えている²⁴⁾。

4. 吉野群山への道

畔田氏は代々紀藩士で、和歌山湊、南仲間町（城西）に住んだ。伴存（寛政四壬子三月生まれ、1792）の代になって、藩医として禄二十石を給せられ、葉

24) 上野益三：“「和州吉野郡中物産志」について”。「奈良女子大学生物学会誌」，No. 10, p. 70—74, 1960.

園管理を命ぜられた²⁵⁾。伴存は時の藩主徳川治室^{はるとみ}の理解と庇護を受けて、かなり自由に研修する余裕と便宜とを与えられた。その経済面での援助は、和歌山の富商雑賀屋長兵衛に負うところが大きであったという²⁶⁾。伴存が藩命を帯びて、調査のため山中に入ると、出てこないことが、数日あるいは十数日に及ぶことが、しばしばであった。彼の遺髪を埋めた墓がある和歌山市広尾町大泉寺の寺門を入った左側に、自然石の「畔田先生碑」が立っている。多紀氏撰というその碑銘に、「外ニ在ルコト数十年。常に雨衣ヲ携エ。糲糧ヲ齎ラシ。或ハ露宿日ヲ累ヌ。老ノ将ニ至ラントスルヲ知ラサル者ノ如シ。」(原漢文)と伴存の行状を伝える。彼はそれに耐える強靱な身体と精神の持主であった。その行動と精神とは、多年山中で日を累ね、困苦に耐えるうちに、自ら体得したものにちがいない。これは吉野群山の峯々を道場として、修練を積んだ修験者達の精神にも通ずるものがある。しかも、その最期の地は採集旅行の途上なる熊野本宮であった²⁷⁾。真に学問に徹し、学問に殉じた人であったといえよう。

伴存の吉野群山紀行の経過は、十津川荘記を読むことによって、その輪郭をつかむことができる。紀州若山(彼の任地和歌山)から高野山へ行く道、高野山から阪本を経て洞川へどう行くか、紀州橋本と和州五条から十津川へどう入るか、また、十津川から熊野へ出る道等、いずれも里程を示して詳細に説く。十津川の谷の東側には大峯山脈が連互している。伴存の吉野群山登山が西側から行われたことが多いのは、このような経過からであろう。北山の谷、大台登山等が別の経路で行われ、前鬼から釈迦岳に登るという方法もとられた。玉置山は熊野調査に際して登ったとも思われる。「群山記」八巻はこのようにして次第にでき上がった。彼が自己の学問を推進するのに如何に雄

25) この菜園は紀の川河口の左岸に、徳川重倫が営んだ別業西浜御殿に接して設けられた。

26) 「贈従五位畔田翠山翁伝」(注3), p. 66.

27) 安政六己未(1859)六月十八日歿。本宮村上地(今、本宮町本宮)に葬る。上野益三:“博物学者畔田伴存の最後の地”『関西自然科学』, (未刊)。

大なスケールをもち、如何に堅忍不拔の精神を以て、それを遂行したかは、「群山記」八巻に明らかに看取される。高木氏²⁸⁾が、「群山記」に載せられた山々の「記と画とに対し現代の登山家の如何なる紀行論文も精細、正確において企及するものがない。釈迦岳や前鬼などの記事に至っては名文で且印象的である。」と評したのは、全く当を得ている。一つの地方の地理的特徴を、これほど正確につき、細大漏らすところなく、独創的なプランで、文字と図画とに再現した日本人がどれほどいたであろうか。

伴存は学者として、当時の習慣では、本草家という範疇に属する。しかし、彼の学問の本領は、単なる本草学ではなく、彼が自らそう自覚していたか否かに拘らず、博物学 (natural history) であった。博物学が植物、あるいは動物、あるいは鉱物のような、天産物を対象とするからには、元来土地に密着した学問だといえよう。伴存はそれらの自然物を物産という言葉で表わしたが、物産の研究から、それらを産出する山川にも興味を向けたのは当然の結果であろう。「吉野郡群山記」も山岳地誌が主体をなしてはいるが、そこに産出する動植物をも詳しく調べ、それらの知識が渾然一体となっていることが、この書がもつ特徴であり真価であるといえよう。

5. 摘 要

畔田伴存著「和州吉野郡群山記」八巻の内容と、その成立の由来とを述べ、従来世上に知られている本書の異本について比較論評した。また、本書の真価はその科学的な記文と、すぐれた挿入図画にあること、地誌と動植物誌とが、渾然として編述されていること等を明かにした。著者は幕末における傑出した博物学者で、その「群山記」は全く異色の大著である。

謝 辞

本文をつくるに当って、堀田美恵さんは伴存の稿本を貸し与えられた。平山敏治郎博士（大阪市立博物館長）は収蔵後の堀田本の閲覧について、多大の便宜を与えられ

28) 高木利太：「家蔵日本地誌目録」（注7），p.175.

た。また、五糸市の御勢久右衛門氏はその蔵書を貸与され、堺市の仲西政一郎氏（泉州山岳会名譽会長）は、大峯諸山についての筆者の問に答えるために時間を割かれた。これらの方々に深く感謝の意を表したい。国立国会図書館、天理図書館の蔵書を閲覧して、益を受けたことも、感謝とともに特記せねばならない。

図 版 説 明

図版 I.

山上嶽之図（部分）。原画彩色，伴存自筆。山上嶽を西側から見る。左方に大天井嶽，左下方に洞川が描いてある。「群山記」第二卷山上嶽記下巻末に載せる。縦 20 cm，横 30cm.

図版 II.

弥山以南の連山。左北山川の谷，右十津川の谷。弥山から南に向って，楊枝森，仏生嶽，孔雀嶽を経て釈迦嶽，その左に宝冠嶽，千種嶽。原画彩色，伴存自筆。「群山記」第三卷弥山記に載せる。縦 25cm，横 30cm.

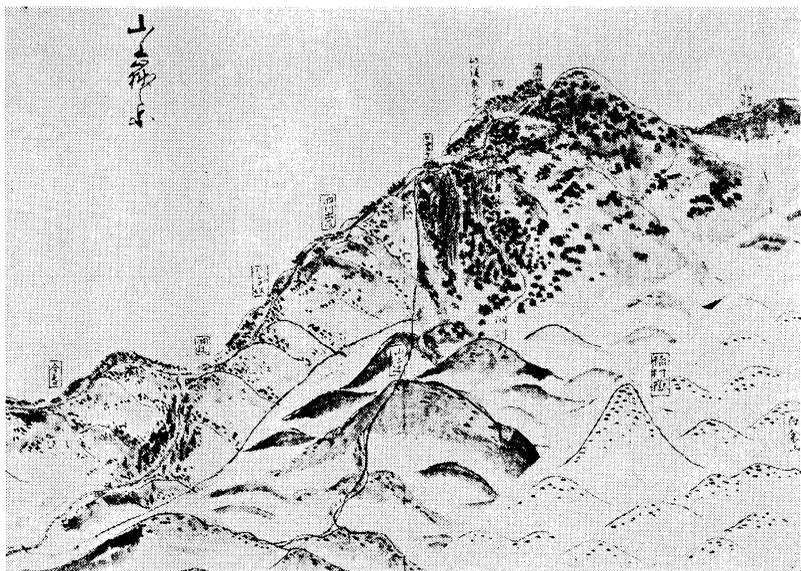
図版 III.

釈迦嶽を西方より見た図。谷は旭ノ川。左手前七面山。「群山記」第四卷釋迦嶽記所載。原画彩色，伴存自筆。縦 23cm，横 30cm。中央の縦の白い部分は紙のつぎ目。

図版 IV.

釈迦嶽と神仙ノ宿。原画彩色，伴存自筆。「群山記」第四卷釋迦嶽記所載。縦 22 cm，横 20cm.

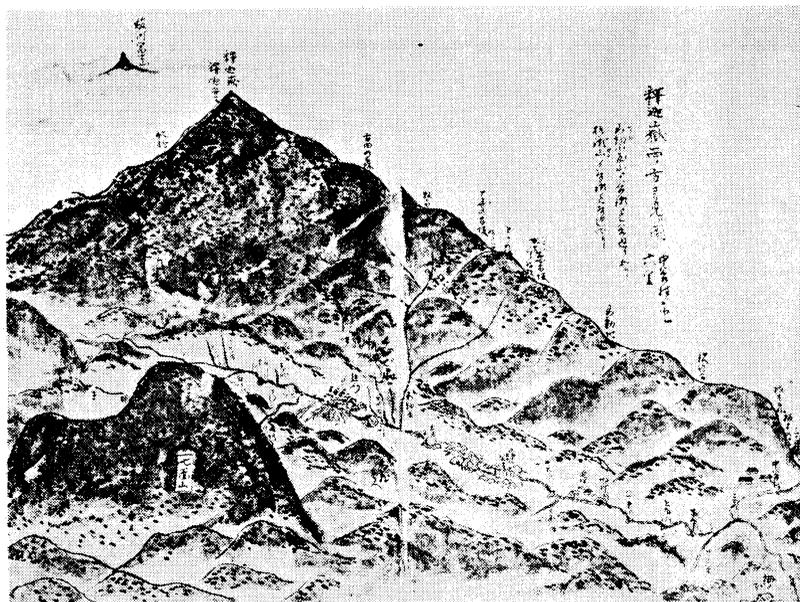
图版 I



图版 II



図版 III



図版 IV

